「わがまち紹介」活動について考察

VG槻輪の会員は茨木市民の方も多いので、茨木市の「わがまち紹介」活動に、趣味を持っています。

茨木市の地図を見ますと、茨木市の北の適切な位置に「新屋坐天照御魂神社」が目に留まります。

新屋坐天照御魂神社

（にいやにますあまてるみたまじんじゃ）

新屋坐天照御魂神社は、第十代崇神天皇の御宇(182年)、天照御魂大神が現在の茨木市福井の西の丘山(日降ヶ丘)にご降臨され、物部氏の祖である伊香色雄命を勅使として丘山の榊に木綿を掛け、しめ縄を引いて奉斎したのが創祀とされ、実に二千百年の歴史を有しており、摂津国屈指の歴史と社格を誇る神社であります。

第十四代仲哀天皇の御宇、神功皇后には三韓を征せられるに当たり新屋の川原にて禊の祓と戦勝祈願をされ、凱旋の後、天照御魂大神の荒魂、幸魂を西の川上と東の川下の辺りに斎祀らせました。（上河原社・西河原社）です。

新屋坐天照御魂神社
（西福井）

また、当社は創建時より朝廷の結びつき、殊の外つよく第二十六代継体天皇の御宇に初めて奉幣使が遣わされて以来、第九十代亀山天皇の御宇まで実に二百十九回の奉幣使が遣わされるなど、神祇官直支配の案上の官幣大社として永く国家平安、五穀豊穣を祈願してきました。

この間、皇極三年(644)には中臣鎌子連(後の藤原鎌足)が神祇伯に任じられ、奉幣使として当社に参詣されるなど、平安時代までは朝野の篤い崇敬がよせられ、社頭は大いなる隆盛を誇りましたが鎌倉時代に至り、嶋下郡の総社と定められるも武家による諸規則の制定・強化、神領没収など社頭の衰微が始まり、室町時代末期の大永七年二月(1527)、細川家の内紛(大永の乱)により兵火に遭うところとなりご神殿、神宝、神器悉く灰燼に帰しました。

そして、天正十二年(1584)、中川清秀公が社殿を再建し、現在の基礎が構築されました。清秀公は当社の氏子中河原の人であり後、その功によって、茨木城主になったと言われています。

新屋坐天照御魂神社
（宿久庄）

その後、明治五年郷社に列せられ、御本殿の外、摂社として出雲社、須賀社の二社と六社神社などの末社が境内に祀られています。

三社が論社とされ、中でも西福井のものが中心的な神社とされる。

○新屋坐天照御魂神社
（西福井）
（茨木市西福井三丁目）
旧郷社

○新屋坐天照御魂神社
（宿久庄）
（茨木市宿久庄五丁目）
旧村社

○新屋坐天照御魂神社
（西河原）
（茨木市西河原三丁目）
旧村社

上記の３社は互いに関連しており、西福井から宿久庄・西河原に分祀されたものとも、『延喜式神名帳』に「新屋坐天照御魂神社三座」と記載されていることから、それぞれが１座ずつに対応するものともみられている。

なお、社名にある「新屋」とは一説には「新野」を意味し、古代における新開拓地の意味であるとされる。

新屋坐天照御魂神社
（西河原）

歴代茨木城主と「新屋坐天照御魂神社」の関係を見ますと、神社の関係者が城主なっています。

茨木村から茨木町、そして茨木市へと移り変わった地域とはどこでしょうか。

茨木がまだ村だった頃、その範囲は、東西は茨木神社辺りから東本願寺茨木別院辺り、南北は茨木川に沿って上泉町北側辺りから茨木高等学校辺りの地域でした。

明治時代の初め以来、茨木村は三島地方の行政の中心地であり、商業や教育の中心地でもありました。明治９年（１８７６年）に官営鉄道が開通し茨木駅が設置され、これが後の茨木の発展の基礎となりました。

万博開催時の
JR 茨木駅前開発

現JR茨木駅を中心として宅地化が進み、それまで自然増程度であった人口は、増加率が大きくなっていきました。

茨木村は明治31年（１８９８年）に茨木町へと変わり、やがて大正時代に入っていきます。川端康成の作品には、大正時代の茨木の風景や店舗などが描かれているものがあります。

昭和23年（１９４８年）１月１日、茨木町・春日村・三島村・玉櫛村の１町３村が合併して茨木市が誕生します。

市民生活の安全と向上のため、警察署・消防署・市庁舎・図書館・市民病院・電報電話局などが設けられました。

昭和30年代から40年代（１９５５年～１９７４年）には、大きな企業が茨木市に進出してきました。昭和38年（１９６３年）には名神高速道路が、次の年には大阪中央環状線が通り、昭和45年（１９７０年）には隣の吹田市で日本万国博覧会が開催され、茨木市内の商工業はますます発展していきました。

日本万国博覧会が開催
昭和 45 年（1970 年）